リリカルなのは　革新者と魔法少女

花開院

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのは　革新者と魔法少女

【Ｎコード】
Ｎ６７６２Ｚ

【作者名】
花開院

【あらすじ】
ＥＬＳとの対話から５０年後、調査をしていた刹那は異世界へと来てしまう。そこで運命を変えられた少女たちと出会う。今、その運命を変革させる

プロローグ

ＥＬＳとの対話が無事に終わってから５０年
人類は徐々に革新を始め『イノベイター』の人口も増えつつある
そして人類初の純粋種のイノベイター、ＥＬＳの一部と一つとなった愛機『ダブルオークアンタ』のガンダムマイスター、刹那・Ｆ・セイエイ
彼は今、クアンタを駆っていた

「この辺か…」

そう言ってクアンタをその場で停止させる

「ヴェーダの情報だとこの辺のはずだと思うんだが…」

メインカメラで辺りを見渡すが、特にこれといったものはない
刹那はヴェーダ（ティエリア）からの情報でその宙域に発生したエネルギーの調査をしているのだ
そしてここに来たのだが、これといって珍しいものはなくデブリがあるだけであった

「何もないが…嫌な感じがする」

刹那は何かを予感していた
あの情報はまるで自分を誘い出すためのようなものなのではないかとすると、センサーが反応しアラートが鳴り響く

「！……あれは…なんだ？」

目線の先には黒く歪んだなにか
それは忽ち当たりのデブリを吸い込んでいく
過去にもこんなことがあった。木星に巨大な穴が開き当たりの物体を吸い込んでいった
だが、今回はそれが目の前で起きている
刹那はクアンタを後退させようとする
が――――

「！吸い込まれる！？」

操縦レバーを必死に動かすもクアンタは黒いなにかに向かっていく
吸い込まれているというよりもまるで呼ばれているかのように静かにＧＮ粒子を放出しながら向かうクアンタ
それでも刹那は抵抗をする
それでもクアンタは刹那の意思を無視する

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！」

そして刹那は黒い何かに突入して意識をブラックアウトさせた

プロローグ（後書き）

感想などを送ってくれると嬉しいです

意見やリクエストも待っています

主人公&デバイス設定

設定

主人公

名前：刹那・Ｆ・セイエイ

魔力ランク：ＡＡＡ＋

容姿：ＥＬＳの一部を取り込み肌と髪は銀色になっていたが、なぜか元の肌と髪に戻りさらに子供になってしまう

性格：劇場版では自分の能力に戸惑っていたが、ＥＬＳとの対話、マリナと分かりあったことから吹っ切れた
　基本的にはあまり変わらない

イノベイターの力は健在である

デバイス：クアンタ

待機時：青い宝石
　ユニゾンデバイスではないが人の姿にもなれる

魔力ランク：ＡＡ

容姿：なぜかフェルトと瓜二つ。だが、髪はカチューシャで止めず

に下げており、青い髪をしている

性格：むやみな戦いは好まない。だが、刹那の場合は本人の意思を優先する

容姿がフェルトだからか、性格も少し似ており刹那に気がある

刹那のことは『様』付けで呼んでいる

主人公&デバイス設定（後書き）

どうでしょうか？

革新者と異世界

「こ、こは……「気がつきましたか？」！」

刹那が目を覚ますとそこには青白い髪の少女がいた
容姿がどことなくフェルトに似ていた。フェルトじゃなくて少しガッカリしたのは秘密
だが、この少女から刹那は懐かしい何かを感じていた

「お前は…？」

「クスッ私は『クアンタ』ですよ」

「！クアンタだと！？」

刹那が立ち上がると、何か違和感があることに気がつく
目線がいつもよりかなり低くなっていた

「縮んでいる？」

「刹那様がこちらに来たときにはすでに体は縮んでおりました。そして私もあの『次元断層』に引き寄せられ、気がついたらこの姿になっていました」

だがなぜフェルトの容姿と瓜二つなんだ？
心の中で刹那はそう思った

「『次元断層』とはなんだ？」

「これは“私たちの世界”では存在しない言葉ですが、“この世界”での用語のようです。詳しいことはわかりませんが私たちは次元規模の迷子になってしまったようです」

「まて。ここは“俺たちの世界”ではないのか？」

「はい」

頭の中で刹那は状況を整理していた
あの時、調査をしているときに黒い何かを見つけてクアンタが吸い込まれた
そして俺は森の中にいる
体が縮んでしまった上にクアンタも何故か人間の姿をしている
しかもここは俺たちの世界ではなく全く違う世界

「理解できましたか？」

「…ああ。元の世界に戻る方法はないのか？」

「すみません。私には…」

「…お前は気にしなくていい」

「でも！」

「お前が気にしたところで何も変わらない。なら俺は俺のやり方で元の世界に戻る方法を手に入れる」

「刹那様…」

「だから心配するな」

そう言って刹那はクアンタにほほえみかける

「／／／！！？？（なんでしょうか？刹那様の笑顔を見ると顔が熱くなります！）」

「どうした？熱でもあるのか？」

「ひゃいっ！だ、大丈夫ですよ！」

クアンタは顔を赤くしながら前で手を振る

刹那はその様子を見て不思議がる

「？ならいいんだが…」

「そうです！私は大丈夫ですよ！」

刹那は本当に不思議そうにクアンタを見ていた

内心、俺のガンダムはこんな性格だったのか？、と疑問にも思っていた

「とにかくここの情報を集める必要があるな。クアンタ、ここの情報はあるか？」

「はい。……ここは日本の海鳴市というところです」

日本には何回か任務で来ていたが、さすがに海鳴市という言葉は聞いたことがなかった

「ここには『魔法』というものがあります」

「『魔法』？」

「刹那様の世界の御伽噺で聞く『魔法』とは違い、こちらの『魔法』は機械などで力を発揮するそうです。例えばこんなこともできますよ？」

そう言ってクアンタは目を閉じる

（刹那様、聞こえますか？）

刹那の頭にクアンタの声が響く

（これは念話というもので刹那様でいえば脳量子波とお考えください。心で私に話しかけてください）

（クアンタ、聞こえるか？）

（はい聞こえますよ。では次に…！）

クアンタの目が見開かれる

「刹那様！すぐ近くで戦闘が行われています！」

「！…いくぞクアンタ！」

「はい！私に捕まってください！」

そして刹那はクアンタの肩に手を置く

その時クアンタの顔が赤くなっていたことを刹那は知らない

「量子ジャンプ…開始！」

そしてクアンタと刹那を青白い粒子が包み込んでいく
粒子が二人を包み込むと光がさらに強くなり、目視できなくなるほど強く光り、消えるとそこには“○”の文字が浮かんでいた

革新者と異世界（後書き）

何か話がグダグダになってしまった

次になのはの初戦闘かフェイトを出すか迷うよね

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6762z/

リリカルなのは　革新者と魔法少女

2011年12月23日00時50分発行